

トイレットペーパーが消えた石油危機から50年

1、第一次オイルショックからも50年

1973年（昭和48年）10月6日エジプト・シリア両軍がイスラエル軍の占領するゴラン高原に進撃し、第四次中東戦争が勃発した。戦争そのものは10月22日には停戦となったが。10月17日アラブ石油輸出国機構(OAPEC)は、エジプト・シリアを援護するため、原油減産とアメリカなどに対する供給制限を決定、石油を武器にイスラエル支持国を揺さぶる「石油戦略」を発動した。原油価格は翌年にかけて約4倍にまではね上がり、低価格の石油を大量に消費する「資源浪費型経済」だった西側経済の根幹を揺るがした。特に石油の99.7%を輸入に頼っている日本は、重大な影響を受けた。第一次オイルショック(石油危機)である。様々なショックを乗り越えてきた人類だが戦争はやめられない。毎日、民間人の死傷者が増えている。

2、列島改造論もあった

当時の日本の状況は、田中角栄内閣（1972年7月組閣）の列島改造景気で土地が値上がりし、それにつれて物価も高騰、賃金の上昇、そして金融緩和による過剰流動性となり、経済はインフレ傾向にあった。しかし、経済成長はピークから下降に転じ始め1974年GDPの伸びは戦後初めてマイナスとなった。第一次オイルショックは戦後回復してきた日本の経済成長がピークの時に起きたのである。（賃金の上昇率も高かった）

3、狂乱物価時代もあった

そのような状況の中で第一次オイルショックの波を受けたものだから、経済界の焦りは常軌を逸した行動に出た。大手商社の買い占めや売り惜しみが相次ぎ、1974年4月には通産省が大手商社6社に対して買い占め自粛を要請、遂には「物価統制令」適用による逮捕者が出る事態になっていた。国民は「狂乱物価」「物不足」に苦しんだ。消費者物価指数は20%以上上昇、具体的には食料品は81%、ガソリン・灯油62.5%、電気料金49.6%、賃金の上昇率は26%であった。

（現在進行中の物価の高騰がどこまで続くか。トマト1個の値段が9月は300円台だったが10月は400円台に高騰している。第二次の狂乱物価時代にならないように、早く戦争をやめるように願うばかりである。）

4、民衆の心理が現れたトイレットペーパー買いだめ

(1)、第一次オイルショックに敏感に反応したのがトイレットペーパーであった。

中東戦争が終わったのが1973年10月24日停戦していたが、上記の「石油戦略」によってオイルショックは世界に大きな影響を与えた。

日本でトイレットペーパーを求める主婦が長い行列を作った最初の日は1973年10月31日であった。起きた場所は大阪府吹田市豊中市にまたがる千里ニュータウンの玄関口・千里中央駅（大阪地下鉄御堂筋線北の終点大阪駅から約25分）であった。なぜ、起きたのか？

千里ニュータウンは日本3大ニュータウンであり日本の高度成長を支えた最初期の大規模住宅地である。（東京では多摩ニュータウン昭和46年入居開始、名古屋では高蔵寺ニュータウン）

千里ニュータウンは、昭和37年(1962年)のまちびらきから60年以上が経過し、人口の減少、少子・高齢化の進行、住宅や施設の老朽化等、様々な課題がみられるようになり、現在は「千里ニュータウン再生指針」を作り再生を目指している。昭和30年代の都市部では、深刻な住宅難によって、住宅建設が既成市街地から周辺地域へと拡大していき開発が進行していた。



行列の右端が千里中央駅

(2)、2008年1月21日のある方が投稿された相談を下記に紹介します。

「下の階の住民から「トイレが詰まった」と言われて。。。

5階建ての団地（築30年）で、私は2階に住んでいますが、昨晚、1階の方が来られて「トイレがつまって汚物が逆流してきた、変なもの流しませんでしたか？」と聞かれました。そんな覚えはないと返事したのですが、とりあえず、トイレが直るまで使用しないでください、という事を他の階の方にも話に言っている声が聞こえてきたのですが、口調からして我が家が疑われているっぽいのです。。。

その日は、トイレ以外に、嘔吐物（けっこう大量）をトイレットペーパーでふき取り、トイレに流したりはしたのですがその時にまちがってビニールなども流してしまったのだろうか？と心配です。

トイレの修理代の半分かいは、私も払ったほうがいいのでしょうか。

我が家は覚えが無い！と言ったものの、今日、業者が来て、修理した時に「2階でつまっていた」と言われたとしたらいやだなあ。。。と考えてしまいます

どうしたら気持ちよく解決するか、どういう言い方をしたらいいか、皆様のお知恵をお貸しく下さい宜しくお願いします。」

この記事には多くの情報が詰まっています。

(3)、5階建、和式水洗トイレ、エレベーターなし

30年前といえば1978年（昭和53年）の建築です。記事では5階建となっています。千里ニュータウンが出来始めた頃（昭和37年）都市の住宅難を解消するために日本住宅公団は5階建（エレベーターなし）を標準として建設していた。トイレは和式水洗式、今では考えられないことですが下水排水管を1階から5階まで共有として設計されていた。千里ニュータウンの入居が始まった頃水洗式トイレは一般の家庭では殆どありませんでした。従っていわゆるトイレットペーパーというものはなかった。トイレットペーパー以前の呼び名は地方によって変わりますが共通語としては「落とし紙」と呼ばれていました。

(4)、公団住宅入居は抽選、競争倍率は高かった

当時公団住宅に入居するには激しい競争があり20から30倍はごく普通のことでしたから当選した人は大喜びでした。喜びのあまり入居注意事項を忘れる人が少なくありませんでした。ある人がうっかりして、水に溶けない「落とし紙」を使ってしまったのです。おそらく数日使い続けたのでしょう。予告通り水の流れが悪くなるばかりか下の階の人に大変な迷惑をかけてしまったのです。このことは当時の新聞にも掲載され新しい文化生活にも新しいリスクが発生したことを学びました。

(5)上下5軒は運命共同体

公団住宅に住む人はトイレ詰まりに神経質になり、トイレに関する限り上下5軒は運命共同体となって、「トイレットペーパーを切らさない」ことをお互いに注意監視をしよう文化が醸成されたのです。

自分のトイレが使えなくなるよりも、他の階の人に迷惑をかけてはいけないという倫理又はトイレを詰まらせると責められてカッコが悪いという恥の文化の広がりがあったのです。

上記の投稿者も、「今日、業者が来て、修理した時に『2階でつまってた』と言われたりしたらいやだなあ。。。と考えてしまいます」と書いています。

何が嫌なのかは判断できませんが、半分弁償する意志はありますから「迷惑感」と「恥ずかしい」とが半々なのかも知れません。

千里ニュータウンに住む人にとっては「トイレットペーパーは死活問題だった」と当時の住民の方の話が2023年10月16日の朝日新聞に出ていました。

(6)買い占めの始まりは千里ニュータウン・井戸端会議

トイレットペーパーを求めるために行列が最初にできたのは千里中央駅に繋がる「大丸ピーコック千里中央店」、時は1973年10月31日特売日の水曜日でした。

第4次中東戦争は終わっていましたが「石油戦略」によって物価の高騰が始まり物不足の

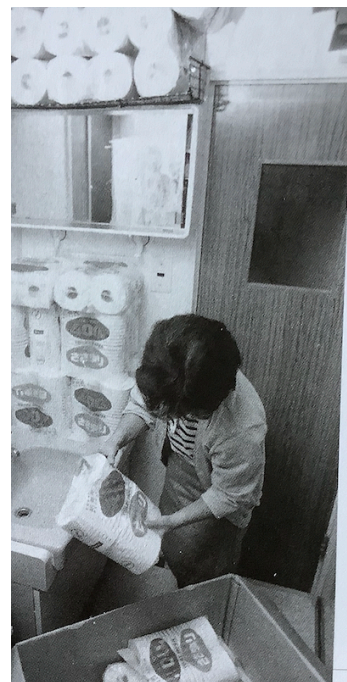


懸念が出始めていました。

ここからは、私の想像が入りますが、千里ニュータウンに住む主婦（この時代はまだ専業主婦が多数であった）が「もし、トイレットペーパーがなくなったらー」と井戸端会議で言ったとしたら、又は「トイレットペーパーが品薄みたいー」と井戸端会議で言ったとしたら、そこにいた主婦は蜘蛛の子を散らすようにその場を離れて近くのスーパーマーケットに走り込んだであろうと想像します。

大阪は安売り「スーパーダイエー」発祥の地である。千里ニュータウンでの出来事は各地の井戸端会議で拡散され瞬時にこの現象は起きました。現在のSNSの役割を専業主婦の井戸端会議が果たしました。

アラブ産油国の「石油戦略」が襲ったのはトイレットペーパーだけではなく、洗剤、塩、砂糖、灯油などの日用品にも及び、人々は売り場に殺到、けが人まで出るというパニック現象が各地で起きた。当時の通産省は「トイレットペーパーは十分にあります」との異例の事務次官談話を発表した、便乗値上げや売り惜しみは後を絶たず、国民は「狂乱物価」「物不足」に苦しみました。



(7)今も50年前も危険と危機は変わらない

50年を経過した今、世界は単独の国家、一強の国家だけでは存続できないような連帯社会になっている。資源のない我が国は全世界に依存して生きている。各種の自給率を高めようという言葉はあるが、政策はみられない。「ものが不足したら」という潜在的な不安感を持ちながら生きている。これからもトイレットペーパー騒動に類似することは起こる。（東日本大震災の時にも経験した）

特に今は情報伝達が瞬時になされる便利さと怖さを持ってスマートフォンを大多数の人が四六時中見つめている。フェイクも夥しい。パニックに巻き込まれる時間は短く、巻き込まれる人は多い。50年前の教訓を活かすことは難しい。そういう状況にあるということを意識して生きていく必要がある。

ウクライナ戦争や中東で起きている争いで多くの犠牲者が出ている。その犠牲者の上に我々は生きていることを忘れてはならない。

余談

岸田内閣の支持率が30%前後と記録を更新していると報道されているが、選挙になると不支持の人の多くが選挙では自民党に投票する。だから、保守政党に属している議員には危機意識はない。人ではなく組織票で守られる。不支持率の高さが選挙に反映する制度に変えない限りこの国は変わらない。だから常に対処療法で切り抜ける。数々のショックを切り抜けてきたのは政策ではなく国民の知恵と献身であることを覚えておきたい。

パリ通信・第142号 2023年10月号

チェルヌスキ美術館

今年の9月はフランスも記録的な高温が続き、10月中旬になりようやく秋らしくなった。イスラエル・パレスチナ武装勢力衝突の影響で、10月13日フランス北部パ・ド・カレ県アラスの高校で、教師ら数名を死傷させる事件が発生し、フランス政府は同日国内のテロ警戒水準を最高に引き上げた。戦争やテロ行為が続く恐ろしい世界で平和の有り難さに感謝しつつ、秋の穏やかな一日をパリ17区モンソー公園の一角にある「チェルヌスキ美術館」で過ごした。

イタリア人アンリ・チェルヌスキ(1821-1896)は、1848年オーストリア支配下にあったミラノを解放に導いた愛国主義者でローマ共和制(1848-1849)議員に選出されたが、共和制崩壊に伴いフランスに亡命した。パリで複数の事業に成功し、フランス第二帝政(1852-1870)の間はスイスに逃れ、1870年フランスが第三共和政に移行すると直ちにパリに戻り、フランスに帰化する。1871年パリ・コミュンにショックを受け、1871年9月から1873年1月まで美術批評家テオドール・デュレ(1838-1927)を連れて世界一周の旅に出る。アメリカ大陸を後にして日本、中国に滞在し、約5000点の東洋美術品を購入しフランスに持ち帰った。

1874年モンソー公園に接するヴェラスケス通りの土地を購入し、コレクションを収蔵する目的でネオ・クラシック様式の豪華な館を建て、東洋美術品に囲まれて暮らした。チェルヌスキは1896年イタリアに近い南仏マントンで死去するが、作品が散逸することを恐れ、1882年には館とコレクションをパリ市に寄贈することを決めており、1898年10月から「チェルヌスキ美術館」として今日なお人々に愛されている。



チェルヌスキ美術館



チェルヌスキが世界一周旅行からパリに戻った1873年から150年を迎えた今年2023年。150周年記念の特別展として彼が日本と中国で購入した美術品、特に阿弥陀像、香炉、陶器、漆器、

根付け、江戸の挿し絵本などが展示されている(2023年10月6日から2024年2月4日まで)。19世紀後半のヨーロッパは万国博覧会最盛期で、1867年パリ万国博覧会には日本も初めて参加し、将軍徳川慶喜の弟・昭武を派遣し膨大な出展物が海を渡りジャポニスム隆盛の契機となる。1889年のパリ万博時にはジャポニスム熱が頂点を迎え、サミュエル=ジークフリート・ビング(1838-1905)がパリに構えた日本美術専門店は大繁盛で、チェルヌスキ・コレクションも数を増していった。

チェルヌスキの日本滞在は横浜から始まり、東京(当時は江戸)、神戸(兵庫)、大阪、奈良を経て上海に渡り、インドネシア、セイロン、インドと旅が続く。彼が持ち帰った日本と中国の品々はヨーロッパの芸術家や職人たちを驚かせ、圧倒的な絶賛を受ける。

展覧会では銀器クリストフルのデザイナーとして知られるエミール=オーギュスト・レイベール(1826-1893)の「二匹の魚」(花瓶)、



ボンボン「大ふくろう」



フランソワ・ボンボン(1855-1933)の「大ふくろう」が備前焼と並べられ、江戸の伝統工芸の影響がいかに大きかったか明らかである。仏像、ブロンズ像、備前焼きの美しさが圧倒的である。

二階の写真展示室(保存のため照明を抑えた小部屋)にはチェルヌスキ美術館所蔵のイタリア人写真家(1850年イギリスに帰化)フェリーチェ・ベアト(1832-1909)の日本の写真(ファク

シミリ版)が数点展示されている。ベアトはヨーロッパでいち早く東アジアの写真を紹介した人である。1868年2冊のアルバムとして販売された日本の写真集から「鎌倉の大仏」「愛宕山の鳥居」「大阪の四天王寺」「京都西本願寺」「行商人」「侍」「お坊さん」「鏡を見る娘」など当時の日本の風景が紹介され



ている。

私が訪れた日は「家族で過ごす週末」に重なり、5歳から10歳までの子供たちと付添いの父兄を対象にイベントを行っていた。日本のラジオ体操の音楽に合わせてウオーミングアップ。鬼や動物のお面を付けて阿弥陀像前でダンスをしたり、紙芝居を見たり、習字を習ったりと楽しそうだった。昔の日本の小学校を再現するようで、幼い頃に触れた文化は一生残るようだと感心した。150年前の日本をパリの高級住宅地区で再発見し、人が生きた証として残せるものの大切さを知り、自分は何を残せるのだろうかと思った。



江戸時代の香炉



フェリーチェ・ベアトの写真